



主日礼拝説教 — 2016年2月7日

弱き肉体を取って下さった

聖書 ヨハネによる福音書 1章 14～18節
テモテへの手紙 1 3章 16節

武田 真治

1、「言は肉となって」

毎年クリスマスには、どこの教会でもこの「ヨハネ福音書」1章14節のみことば「言(ことば)は肉となって、わたしたちの間に宿られた」が読まれるのではないかと思います。まさに「ヨハネ福音書」ではこの言葉こそ、クリスマスの出来事を表わすものなのです。この「言(ことば)」はまさにイエス様のことを指しているのです。

イエス様が地上に来て下さったことを「肉となって」と表現することは、「ヨハネ福音書」だけのことではありません。今日、もう一つ読んで頂いた「テモテへの手紙1」の3章16節にも「キリストは肉において現れ、霊において義とされ、天使たちに見られ、異邦人の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた」とあります。この言葉は当時、初代の教会の礼拝で歌われていた讃美歌の一部だと言われているものです(ですから詩のように段を下げた一文一文横に並ぶ形式で書かれています)。ここで大事なことは、この讃美歌の歌詞にも歌われているように、キリスト教の始まりの時から、イエス様がこの世界に来て下さったことを「(私たちと同じ)肉となって」下さったと言いつづけていたことが分かります。しかもそのことを賛美できることと考えられていたのです。この点はとても教えられるように思います。今日は、イエス様が「肉」となられたことの意味について考えたいと思っています。

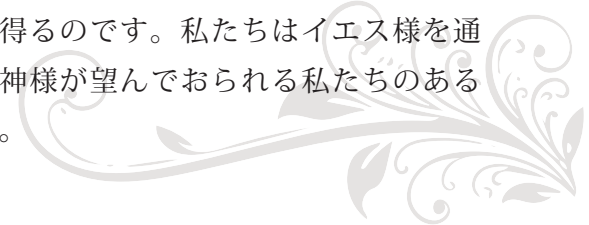
なぜイエス様は肉となられたのか？

2、「肉」とは「人間」となること

聖書を読む限り、その理由は大きく分けて三つあるように思います。その最初の理由として考えられるのは、私たちに神様を示そうとして下さったからと言え得ます。

岩波書店訳の聖書ではこの箇所を「ことばは肉(なる人)となった」と訳していますし、柳生直行訳も「この言葉は人間の肉体の形をとり」となっています。このように「肉となった」ということは「人間となった」という意味を持っています。この事は当たり前だと言われればそうですが、「コロサイの信徒への手紙」2章9節に「キリストの内には、満ちあふれる神性が、余すところなく、見える形をとって宿っており」とありますように、見えない神様に見える形で示すために「人間となって」下さったと考えられます。「ヨハネ福音書」が「言(ことば)は肉となって、わたしたちの間に宿られた」と語る言葉の中に込められた思いも何よりこの点であったと思います。

言い方を変えれば、イエス様が人間となってこの地上に来られ、実際に生きられたことによって、神様が私たち人間に望まれておられる本当の生き方、神様に従う人間としての本来の在り方を、この世に見える形で鮮やかに示して下さったと言え得るのです。私たちはイエス様を通して、神様がどのような御方であるかを知り、同時にその神様が望んでおられる私たちのあるべき人間の姿(=人間としての本義)も教えられるのです。





3、「肉」とは「弱さ」をも表す


ただ、ここでイエス様が単に「人間となった」点だけを言いたかったとすれば、新約聖書の言葉であるギリシャ語には、人間のことを表す（アネール）や（アンスローポス）という言葉がありますので、それらを使えばよかったと思いますが、ここで用いられている言葉は（サルクス）であり、これは「人」よりも「肉」を表す意味がはるかに強い言葉なのです。ヨハネがわざわざこの言葉を使っている点にこだわりや意図を見ようとする解説者も多くいます。この点を踏まえれば二つ目の意味として、イエス様は私たち人間の特に「肉」の部分と共に担って下さるために、この世に来て下さったとも言い得るのです。

ここには、旧約聖書から続く「肉」についての理解が大きな影響を与えていると言い得ます。代表的なものを紹介するならば、「創世記」二章の人間の創造の場面を挙げる事が出来るでしょう。

神様は、土のちりから人間（＝アダム）を創造されたのですが、「独りでいるのは良くない」と思われて、そのあばら骨を取って「女（＝エバ）」を創造されました。そしてアダムのところにエバを初めて連れて来られた時に、アダムが発した言葉が「これこそわたしの骨の骨、わたしの肉の肉」（二十三節）でした。この言葉の意味としては（私の骨肉＝同じ体を持っている）という意味もありますが、当時、人間の力は骨に宿ると考えられており、肉の部分は痛みを感じる場所であり、切れば血が出る場所であることや、また、人間が死んで葬られると肉は腐って消えてしましますが、骨は残ることが多いことから、「骨」は人の強さ、「肉」は人の弱さを表わすという意味もありました。その意味で、アダムがエバを見て「これこそ私の骨の骨、肉の肉」と言ったのは、自分の強さと弱さの両方を分かってくれる存在だと感じたということであつたとも読めるのです。即ち、罪を犯す前の二人の関係は、お互いの強さと弱さを共有できる関係であつたと。それが夫婦やパートナーとしてのあるべき姿であると（私たちは残念ながら、アダムとエバが罪を犯した後に生まれた人間なので夫婦でもなかなかそのような関係を築けないですが）。

ここから言えば、イエス様が私たちと同じ「肉となって」下さったということは、まさに私たちの「弱さ」を敢えて担って下さったということの意味すると言い得るのではないのでしょうか。まさに「ヘブライの信徒への手紙」4章15節にある「（イエス様は）わたしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点において、わたしたちと同様に試練に遭われたのです」の言葉の通りです。

私たちの弱さや愚かさを分かってくくださるからこそ、イエス様の名前を通して祈り願い求めるのではないのでしょうか。祈願の多くは私たちの弱さや忍耐力のなさから来ているものがほとんどです。充分以上に神様から守られ、恵みを与えられているのに尚もお願いすることは、わがままな行き過ぎた行為です。本来なら「もう、お前には他に一杯与えているではないか」と神様から叱られても文句の言えないことです。しかし、どうしても苦しく辛いが故に「主よ、何とかしてください」と祈り願わざるを得ないのが私たちです。そのような私たちの弱さや愚かさを理解して下さる為に「肉となって」下さったイエス様だからこそ、私たちの勝手な願いや祈りにも耳を傾け、理解して下さり、聞き届けて下さるのです。私たちは本当は「憐れんで下さい」としか祈れない者なのですから。





4、私たちが救い出すために

イエス様が「肉になって」下さった三つ目の理由は、私たち人間を救い出すためです。実はこれが一番大きな理由と言った方が良いでしょう。救い主としてイエス様はこの地上に降誕して下さったのです。これこそまさにクリスマスの福音です。神様と私たちの正常な関係を取り戻すためにイエス様は来て下さったのです。

ただ、ここで忘れてはいけないことは、この神様と私たちとの関係を修復し、あるべき姿に戻すためには、イエス様自らが十字架に架かれ、私たち人間の罪の贖い（あがない）を成し遂げる必要があったという点です。つまり、イエス様がこの世に来て下さったのは、十字架の上で死なれるためでもあったということなのです。まさに私たちが救い出すために、命を捨てるために「肉となって」下さったのでした。それはもう感謝する他何もない最高の恵みです。

14 節は「言は肉となった」の次に「わたしたちの間に宿られた」と続きます。ここでの「わたしたちの間に」とは、一つの意味としては（人類、世の中）と理解できますが、もう一つの意味として（信仰者たちの間に）とも読めます。まさに「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである。」（「マタイ福音書」18 章 20 節）と言われたイエス様の言葉通りに、わたしたちが集まっているこの礼拝の只中に来て下さるのです。そして、聖霊を注いで下さり、祝福と御慈しみで包んで下さるのです。

5、「おいでください、この胸に」

実は、前の協会訳聖書ではこの 14 節の後半は「わたしたちのうちに宿った」と訳されてきました。なるほど確かに、究極的には私たちの「内に＝心と体の中に」イエス様が「宿って下さる」ことこそが、私たちの信仰の目標とも言い得ます。

この後、讃美歌 443 番を歌います。その一番の歌詞はクリスマスのことを歌っています。即ち「冠も天の座も 惜しまずに捨てて 地にくだるみ子イエスを 泊める部屋はない。おいでください イエスよ ここに この胸に」と。

この素敵な讃美歌の言葉のように、私たちの間に、この礼拝のこの場所に、そして何よりこの私の心の中に「主よ、来たりませ」と祈り願って行く者でありたいと思います。

(礼拝説教より抜粋)

